

趣旨説明

井上克人

今、哲学の分野において「世界哲学」という考え方が注目されつつある。これまで「哲学」と言えば西欧哲学を指し示しており、日本の大学に「哲学」の講座が開講されて以来、それは西洋哲学史の紹介と受容を意味していた。現代でもそれは変わらず、わが国の哲学界における哲学研究はもっぱら欧米の哲学が主流である。

しかしグローバル時代を迎えた二一世紀、哲学も地球規模的眺望が重要な課題となっている。前世紀以来、知の領野は徐々にグローバル化してきたが、哲学史の枠組みはいまだその方向へと更新されているとは言えず、新しい哲学史の構想が必要である。しかし、その一方で、「日本哲学」という分野が、近年、国外の若手研究者の間で強い関心を示してきており、その研究の勢いには目を瞠るものがある。実際、日本の哲学書の欧米語への翻訳、さらに欧米語の日本哲学雑誌も刊行され、日本哲学

関連の学会が国外で定期的に開催されている。これは、明治期中江兆民をして「日本に哲学なし」と語らしめた西欧中心主義の哲学史観を乗り越え、ようやく辿り着いた状況であろう。したがって、脱西欧化を企図する「世界哲学」の構想は、一つの新たな知の枠組みを呈示する日本哲学から、まさに多くを学ぶことができるはずなのである。

さて今回は、日本の哲学をその研究主題にしている張政遠氏（香港）、フェリペ・フェハリ氏（ブラジル）、ロマン・パシユカ氏（ルーマニア）の若手研究者が登壇し、「世界哲学」における「日本哲学」の位置づけ、役割などについて報告がなされた。また「世界哲学」という概念自体に、事実まだ明確な定義がないので、この点について、最近このテーマで積極的にパネルやシンポジウムを企画されておられる、古代ギリシア哲学がご専門の東京大学教授、納富信留氏にその詳細な内容と方向

を論じていただき、また上記三名の報告に貴重なコメントをいただいた。

ただ、ここで改めて考えてみたいのは、テーマとして掲げた「世界哲学をリードする日本哲学」という場合、「日本哲学」をどう捉えるか、という問題である。上記の海外における「日本哲学」研究の躍進はめざましいものの、その殆どが西田幾多郎・田辺元に代表されるいわゆる「京都学派」の哲学に特化されている傾向がある。もちろん、それは大乗仏教の伝統に根ざした日本独自の独創的な哲学であって、最近ではまた儒教との関連も指摘されている。しかし日本の哲学には、関東圏の哲学もあり、例えば井上円了、桑木厳翼、大西祝をはじめ、現代では大森荘蔵や廣松渉、坂部恵、市川浩、野家啓一など独創的な哲学が存在する。しかしこうした哲学の紹介は、最近国際的に躍進してきた井上円了の研究は例外として、海外ではなおざりにされているのが実状である。

では世界哲学をリードするのがなぜ「日本思想」ではなく「日本哲学」であるのか。それは、明治期から移植された西欧哲学との格闘の中で改めて自覚されて来た日本の思考の枠組みを表明しているからである。「哲学」がいわゆる西欧哲学である場合には、確かに形而上学的な根拠づけと論理的究明が要求される。しかし脱西欧化を提唱する「世界哲学」は、そうした狭い枠組みを超えて、もっと柔軟なパスベクトイヴから世界を捉え直し、異文化間の中で互いに理解し合う開かれた知見を

目指すべきものであろう。

ふり返ってみれば、中村元博士が創出された「比較思想」は、そうした課題を持つていたはずである。そういう視座に立てば、「日本哲学」は「日本思想」であってもよいのではないだろうか。あえて「日本哲学」と言うのであれば、たとえ理論的根拠づけを欠くとしても「日本思想」をも含んだかたちで理解すべきであろうと考える。因みに当学会の名称「比較思想学会」の英語訳は Japanese Association for Comparative Philosophy なのであって、「思想」が「哲学」と英訳されていることに留意されたい。「日本思想」をも含んだかたちで「日本哲学」を謂うのであれば、徳川期における伊藤仁斎の古義学、荻生徂徠の古文辞学の方法、契沖および本居宣長の国学における古典解釈学、そして懷徳堂の富永仲基の「加上説」なども「哲学」的思惟の範疇に含めてよいのではないか。とくに富永は、各民族の文化を比較観察し、思想に現れる「くせ」に着目しており、まさに「比較思想研究」の先駆者とみなしても過言ではないであらう。

敷衍して言えば、「世界哲学」における異文化間対話を考える場合、諸民族独自の文化の翻訳による脱コンテクスト化、再コンテクスト化をも考慮に入れなければならないであろう。

(いのうえ・かつひと、宗教哲学・東西比較思想・日本思想、

関西大学教授)